

2020年5月10日（日）久宝教会 家族の日礼拝

メッセージ「みんな神様の家族です」 牛田 匡 牧師

聖書 エフェソの信徒への手紙 2章 17-19節

今日は「母の日」です。久宝教会でも昨年まではこの5月第2週の礼拝を「母の日礼拝」と呼んでいました。しかし、近年では多様な家庭のあり方が増えて来ています。そもそも「母の日」は100年ほど前に、アメリカのある教会で、亡き母親を偲んだ記念会を5月に持ったことから始まったそうですが、お世話になった母のことを思い、感謝の気持ちを伝える日であるならば、その対象は何も母親に限らず、父親であっても、祖父母であっても、またいわゆる血縁を越えた「家族」であってもよいわけです。ですので、私たちの教会では「母の日礼拝」という名前をやめて、「家族の日礼拝」という新しい名前を付けて、この5月第2週の礼拝を持つことになりました。

先ほどのリタニー（交唱）の中にもありましたが、今、同じ家の中で一緒に暮らしているかどうかはともかくとして、私たち一人一人には、母がいて父がいて、さらにその母と父、祖父母がいます。今の自分がいきなり現れたのではなく、多くの方々がつないで来られたバトンの上に、今の自分がいます。ですから「人は一人では生まれて来ることはできない」と言うことができます。そしてまた、言うまでもなく、今この時も「人は一人では生きていけない」……。血縁に限らず、多くの方々とのつながり、支え合ったり助け合ったりする関係性の中になれば、生きて行くことができない存在……。それが人間です。そんな私たちですが、今日は「家族」について思いを馳せながら、共に礼拝をしたいと思えます。

先月から礼拝をインターネットで中継するようになり、礼拝で歌う賛美歌を選ぶ際に、著作権のことなど、今まで以上に様々なことを考えて選ぶようになりました。その上で「家族の日」「母の日」の礼拝として歌う賛美歌を考えていた時に、思い出されたのが、先程歌いました1954年版の『讃美歌』510番です。あまり馴染みのない方もいらしたかもしれませんし、また懐かしいと思われた方もいらしたかもしれません。私は中学生の時から、親元を離れて学校の寄宿舎に入り、寮生活を送っていました。キリスト教学校でしたので、そこで聖書や賛美歌と出会ったわけですが、この510番はそこで親元を離れて暮らしている中学生や高校生たちが、よく歌っていた賛美歌でした。

もう一度歌詞を見て見ましょう。ここに歌われている人は、故郷を離

れて生活をしているのですが、「幻の影、移ろいゆく花を追いかけて、浮世をさまよっている儂い私たちがいる。そして故郷には、そんな自分のことを心配して、春も秋も年中、いつでも涙を流しながら、祈っている母がいる」という歌です。この歌も曲も、何だかしんみりする歌で、学校では好んでよく歌われたことを思い出します。この讃美歌が作曲されたのは、1895年とありますが、19世紀のアメリカ信仰復興運動、いわゆる「リバイバル」の中で生まれた福音唱歌だそうです。それが明治時代に宣教師たちによって日本にも紹介され広まったそうです。しかし、「田舎のお母さんが泣いてるよ」というのは、あまりにセンチメンタルすぎるということで、賛美歌としての評価はあまり高くなく、20世紀のアメリカの賛美歌集には収められていなかったとのことでした。

この歌について、私にとって発見だったのは、先日出席した礼拝と讃美歌についての勉強会の席で、講師の方から「この『讃美歌』510番は、賛美歌と言うより、^{おど}脅しの歌ですよ」と言われたことでした。それまで『讃美歌』集に入っているのも、当然「賛美歌」としか考えたことがありませんでしたが、そう言われてから改めて歌詞を見て見ると、確かに「お母さんが泣いてるから、早く神様の下に帰りなさい。お前のために祈っているお母さんもいつまで生きているか分からないんだから、後悔しないうちに、早く神様に立ち返りなさい」という^{おど}脅し文句ばかりが続いています。ゆったりしたメロディーと、感傷的な歌とが優しく聞こえますが、その指摘を受けて初めて、私がこの歌に感じて来た違和感の原因が分かりました。

教会は「目に見えない神様の生きた身体」、目に見える形となった組織であり、また教会は地上の地縁や血縁などを越えてつながった「神様の家族」だと言われて来ました。その言葉自体は正しいことだと思いますが、明治期に宣教師たちによって宣教が始められて以来160年以上を経ても、依然としてキリスト教徒は人口の1%を超えていません。そのような日本において、「教会は神様の家族」というこの言葉は、一体何を意味して来たのでしょうか。「あなたはクリスチャンですか。じゃあ私と同じ神様の家族ですね」と言ったり、「あなたはクリスチャンじゃないのですね。じゃあまだ神様の家族ではありませんね。あなたが早く本当の神様に気付いて、私たちの教会に来てくれるように、お祈りしていますね」と、言ったりして来なかったのでしょうか。それこそ、「早くこっちに戻って来いよ。故郷のお母さんが泣いてるぞ」と情に訴えて来た所もあったかもしれません。しかし、それが本当に2000年前にイエス様がこの地上を歩き、伝えられた福音だったのでしょうか。どのよ

うに思われるでしょうか。

さて、今日の聖書の箇所は、「エフェソの信徒への手紙」の中から「神の家族」について述べられている箇所でした。「キリストは、私たちの平和です」（エフェソ 2：14）という有名な言葉の後に続いている部分です。この手紙は、一説によると紀元 60 年代にパウロがローマで牢屋に投獄されていた時期に書かれたのではないかと考えられていますが、当時の教会におけるユダヤ教徒から改宗した「ユダヤ人キリスト教徒」と、異なる宗教から改宗した「異邦人キリスト教徒」との間の対立や確執などの問題に対して、書き送られた手紙だと考えられています。

17 節には「キリストは来られ、遠く離れているあなたがたにも、また近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせてくださいました」とあります。それまで異邦人として、神様の道から遠く離れて暮らしていたあなた方にも、キリストは来られて、平和を福音として告げ知らせてくださいました。また旧来ユダヤ人として、神様の福音の近くにいたはずの人々も、数々の規則（律法）にがんじがらめになっていて、却って不自由で、平和には生きられていませんでした。しかし今、キリストが来られたことによって、あなたたちも私たちも皆が同じ神様の一つの霊を共に持つ者とされました。そこには全ての対立がなくなり、キリストにある一致、平和があります。「ですから、あなたがたは、もはやよそ者でも寄留者でもなく、聖なる者たちと同じ民であり、神の家族の一員です」（19）と言われている通りです。

ここで神の「家族」と翻訳されている言葉は、直訳すると「家の者」「家の一員」です。親子兄弟という血縁だけの家族関係を言うのではなく、当時の社会状況で言えば、奴隷や召使たちまでも含んだもっと広い概念です。それらの人たちみんなが「神の家、神の国に住む資格を与えられた『神の家の者』になりましたよ」ということです。つい私たちは、家族や兄弟間でも、誰の年齢が上だとか下だとか、一緒に暮らしている時間が長いとか短いとか、様々なことで優劣や順序をつけようとしてしまいます。今日の聖書の言葉も、その手紙が執筆された背景には、紀元 1 世紀の初代の教会においてすら、「ユダヤ教の出身か、そうではないか」「割礼を受けているか、受けていないか」「生前のイエス様と行動を共にしていたか、していないか」など、共にイエス・キリストを信じようとする仲間内でさえ、内輪もめがあり、お互いの間に線を引き、優劣や序列を付けようとする動きが、絶えずあったということが分かります。そこに「平和」はありません……。

しかし、イエス・キリストはその十字架によって、そのような線引き、

対立や敵意を滅ぼして下さいました（エフェソ 2：16）。十字架と、そこから引き起こされたイエス・キリストを見上げる私たちは、自分の中にある線引き、人と人との間に境界線を引いて、上から目線で優越感をもって眺めることや、自己保身のために自分の有能さや価値を必死に訴えることから解放されて、平和に、自由になれるはずです。

本来であれば、この後に皆で歌いたいと選んだ賛美歌は、『讃美歌 21』の 546 番「世界中の父や母を」でした。著作権の関係上、インターネットでの中継配信や録画の閲覧ができませんので、今日は歌うことができませんが、お手元に『讃美歌 21』をお持ちの方はどうぞ開いて、歌詞をご覧頂ければと思います。「全ての命の親なる神様からの祝福が、人となられたイエス・キリストが、人の心に自由を与える聖霊が、すべての家庭の上に、愛と平和を増し加えて下さいますように」というお祈りの賛美歌です。先の 1954 年版の『讃美歌』510 番と比べると、歌われている内容の違いが、よく感じられたのではないのでしょうか。

神様の家族とは、教会につながっている人たちだけのことではありません。そもそも神様は教会の中だけに留まっておられるような方ではありません。命の創り主である神様が創られたこの世界の全て、みんなが神様の家族です。イエス様が十字架で示されたその愛は、受け取り手を限定するようなものではなく、全ての人に向けられているものでした。そのれっきとした事実の上に立っているからこそ、私たちは自分の能力の有る無しや、何かが出来た出来ないに関係なく、神様と共にある平和な生き方へと今日も招かれて行くことができます。

先週、新型コロナウイルスへの対策としての「緊急事態宣言」が全国で今月末まで延長されることが発表されました。医療現場や介護福祉現場で働かされている方々の日々の奮闘を思います。また長引く「自粛」で仕事がなくなり、経営が立ち行かなくなっている方々のことを思います。さらに子どもたちも、学校にも幼稚園や保育園にも行けず、近所の公園の遊具すら使用禁止になり、家の中に閉じこもり放しで親子で息が詰まっていることと思います。多くの人たちが痛みを覚えつつ懸命に暮らしている日々ですが、そのような状況で、もう一つ明らかになったのは、私たちの社会が未だに持っている差別や暴力ということでした。

「不要不急の外出」の自粛に加えて、他府県への移動の自粛も言われていましたが、他府県のナンバープレートを付けた車は、イジメやイタズラをされるのだそうです。そこには、不要不急ではない様々な事情が

あるかもしれないということへの配慮が欠けていますし、更には「県外ナンバーを付けているだけで、住んでいるのは県内です」という証明書を発行し始めた自治体すらあると聞いてあきれてしまいました。それではまるで「同じ県内に住んでいる身内だからいじめないで下さい。この証明書を持っていない他府県の方は、身内ではないのでどうぞ嫌がらせしていいです」と言わんばかりです。他人との接触やつながりが減らざるを得ないこのような時だからこそ、今までにも増して他者への配慮、想像力を持って、接していく必要があることを思わされています。

私たちの「家族」とは、どこの誰のことでしょうか。「誰があなたの家族ですか」というこの問いは、イエス様が律法の専門家に問いかけた「あなたは誰の隣人となりますか」(ルカ 10:36-37)という問いと同じ問いとして、このコロナの時代に生きる私たちに響いて来るように感じています。

今、各地で衣食住に困窮している人が増えています。「新しい病気にかかる前に、食べていけなくなってしまう」と言っている声も聞こえますし、様々な事情から自死を選ばざるを得なくなってしまった人が増えて来ることが心配されます。あたかも、これまでの社会が目を背けて、取りこぼし続けて来た「付け」が回って来ているようにも感じます。政府や自治体からは「ステイホーム」「おうちにいよう」と盛んに言われていますが、ただ単に閉じこもっているだけでは、この社会は変わって行きようがないでしょう。そのような中、インターネットを使って寄付金を集めて活動をする「クラウド・ファンディング」などが、各地で興って来ています。単なる「ステイホーム」で、家の外の出来事に目を向けないのではなく、「FROMホーム」で家にいても出来ることに取り組んでいくこと。家の外にも、自分の家族がいること。他人事で済まさないこと……。みんな同じ神様の家族です。コロナと共に生きる新しい時代の新しい社会は、そこから始まっていくのではないのでしょうか。「みんな神様の家族です」。命の神様から今日も生かされている私たちは、この事実を旨に今日もそれぞれの場所にあって歩み出して行きます。